２．子どもの言葉から動かされたこと、気になったこと

●把握している世界の範囲、常識感覚

話を聴いた子どもたちの「ふつう」という感覚がわかりにくい。ふつうって何？と聞き返しても、彼等にとってあまりにも無意識なことなので答えに窮する。ふつうって、ふつうです。まさにこの言葉の表す範囲が、子どもたちの生きている世界感覚を表している。

限られた空間・時間概念の中で暮らす範囲では、大人からみると小さな世界に住んでいることだろう、と思ってしまうが、情報化社会に生きる彼等のリアリティは、大人が感じているのとは、少しちがうかもしれない。パソコンからのインターネットへのアクセスについては、弊害を指摘する各方面の声がある。フィルターをかけることが可能とはいえ、子どもが自分で使うようになると、多様で過激な世界に直接ふれていくことによる影響を大人たちは不安に感じている。情報をそのまま素直に受けとめていく免疫のないこどもたちに与える潜在的な影響ははかりしれないだろう。

一方、パソコンには小学生から日常的に触れている子どもも多い。ケータイも日常にどんどん入ってきている。小学生でもケータイを持っている子どもに多いのは、防犯のため親が連絡手段に活用したい、という積極的な利用ケースだと聞く。我が家も学童保育を受けられなくなった４年生から発信先限定の携帯電話を持たせている。最近、メール機能が付いた新機種に替えたが、電車での移動中など電話が受け取れない時にも確実にやりとりできることで、活用の範囲が広がった。

- **ごはんを食べて学校に行くとふつうにしてる。（小学５年男子）**
- **帰る時は友だちと一緒に帰ってます。まず明日の準備をして、学校の手紙をお母さんに渡して、宿題をやります。それから友だちと遊んだり、習いごとに行ったりします。（小学５年女子）**
- **家に帰ったら、晩ごはんをたべて、お風呂に入ります。宿題はそんなにないです。テレビはドラマとかみてます。（中学２年女子）**
- **まあ、学校ではふつうに部活までやって、バレー部ですけど。家には 6：50 に帰ってきます。夕食を食べて、お風呂に入って、そのあとテレビをみたりパソコンでネットにアクセスしたりメールをしたりしてます。ケータイは持ってないです。寝るのは 12 時頃。（中学２年女子）**
- **雨の日は部屋で遊ぶけど、ほとんどの時は全員でクラス対抗でサッカーをやってます。（小学５年男子）**

● 自分で考えて、行動に移してみる。

話を聴く中で、他愛ないようにみえても子どもたちが自分で考えてチャレンジをしている様

子が垣間見えるのが頼もしく思えた。今回話を聴いたのは、親の了解が得られたという条件もあるが、比較的親の目が行き届いていると思われる子どもたちだった。裏返すと、親の影響や期待を潜在的に大きく受けている子どもたちなのだ。その期待に素直に応えようとする小学生、その傘から飛び出そうとし始める中学生、といった発達の様子がみえた。

- **幼稚園の時から自分で描いていた。今は工作用紙でカードを作ってる。ゲームとかテレビのキャラクターとか、自分で考えたキャラクターとかを描いて、友だちと交換したりしてる。（小学５年男子）**
- **お小遣いが下がったのがショック。1 月からお手伝いをしたら一回 10 円の給料制にして、と自分で提案したんだけど、たくさんお手伝いすれば増えると思ってたのに、そうはいかなかった。結局 500 円もらってたのが、300 円しかもらえなかった。2 月は 100 円。最低…。（小学５年女子）**

● タブーという感覚

「触れてはいけないことがある」ということを、子どもたちは大人が思っている以上にしっかりと理解しているのではないかと思った。ここでは、「うざいと思うのはどんなとき？」という気軽な質問のつもりだったが、最初のインタビューでいきなりひっかかりを感じた。その言葉で子どもの表情が凍ったため、具体的な経緯を聴くことは控えた。

子どもたちは、学校の先生に「その言葉は使ってはいけない」ということを厳しく言い渡されている様子だったが、その口調から子どもたちは背景となった事の重大さを感じていたようだった。

このことから、ひとりひとりの子どもの反応を慎重にみながらインタビューを進めた。

- **先生に、絶対言ってはいけない言葉っていわれていて、絶対言いません。（小学５年男子）**
- **「うざい」という言葉は、使いません。先生に絶対に言ってはいけない言葉だと言われているから。（小学５年女子）**

● 癒される時間や場所

身近な自然が子どもたちを癒している。いつも遊ぶ公園の草や木。見晴しのいい場所や、体を横たえることのできる暖かい場所など。田舎の親戚など自然豊かな土地と触れられる機会は、家庭環境に大きく左右されるのだろう。

友だちと過ごす時間を心地よく思う一方、一人で過ごすことで癒されることが多いように思えるのは、子どもがひとりになれる場面がいかに少ないか、ということをあらわしているのか

もしれない。子どもが自分の内面と向かい合う成長のための時間をどう保証し、見守るか。これは昨今のコミュニティ環境や安全管理が気になる親にとっては、とてもさじ加減の難しい課題だ。

- **好きな場所は、自然があるところ。公園の芝生、運動ができるところ。ひだまり公園が好きです。（小学５年男子）**
- **好きな場所は、寝転がってのびのびできるところ。（小学５年女子）**
- **好きな場所は、冬のこたつ。ふとん（冷たい時はいやだけど）。（小学５年女子）**
- **一日の中で好きな時間は、部活から帰って寝るまでの時間。（中学２年女子）**
- **一日の中で好きな時間は、学校でみんなと話してたり、家でゴロゴロしてるとき。（中学２年女子）**
- **好きな場所は、公園の大きな木の下。さっき話した、上にのぼったことがある木。落ち着くから。（小学５年男子）**
- **好きな場所は、近くの公園の展望台。（中学２年男子）**
- **好きな時間は、パソコンやってるときと寝てるとき。それから絵を描いてるとき。友だちとバカさわぎしてるとき、美術とか音楽とかに触れてるとき。（中学３年女子）**

● うそのレベル

まったくうそはつかない、という子どもはいないだろう。親の感じる不安をよそに、子どもは、言葉と事実の乖離を自覚しながら生きる術を身に付けていっているように思う。その程度のうそは、いつも子どもを気にかけている親なら、「適当に言い逃れているな」ということは感じとっているだろう。また、自覚しているうそのレベルは、子どもの発達の度合いによって異なる。他愛のない冗談めいたものもあるが、自分でうそをついている、と自覚しながらそれをクールに受けとめている子どもの口調に少しどきっとした。

- **嘘をつくのは、家に帰る時間に遅れたとき、遠くで遊んでたから時間がかかったとかいうことがある。それから、宿題を朝やるつもりで忘れたときとか、勉強で時間がなくてとか言う。（小学５年男子）**
- **親に怒られるのは、約束を守れなかったとき、やってないのにやったとか言ったとき。（小学５年男子）**
- **うそをついたことはない。あ、友だちに、その子が好きな芸能人に会ったことがあるとか言ったことはあるけど。それくらい。（小学５年女子）**
- **うそをつくこと、ありますよ。友だちにばらさないでね、といわれた秘密をばらすとか。（中学２年女子）**

● **家庭環境～親の影響**

「子どものことをちゃんと気にかける」というのと、「過干渉である」ということの見極めをどう測っていいかわからないところに、今の親たちの一番の不安があるのではないだろうか？子どもは身近な大人の影響を確かに受ける。結果、親の意向に反発することになるのも含めて、その影響は親が思っている以上に深くしみ込むように思う。

学校教育の場面で、新聞を読むことの大切さを教育される場面はあると思われる。今回話を聴いたこどもたちは、新聞をほぼ読んでいない。よほど関心があるテーマやできごとがないかぎり、自発的に新聞を手にするということはないのは、この年代の子どもだからだろうか？しかし、テレビのニュースはみんな見ている。ほとんど一様に「朝起きたら親がテレビをつけているから」。その流れで世間のニュースに出会うことになる。社会の情報の入り口は、朝起きた時のテレビ番組から、というのは大きな影響力のひとつだ。

その他、自分で見たいアニメなどを除けば、家の人が見ている番組の傾向に影響されることは大きいのは自明だが、特に小さいうちは親が熱心に見ていたり、親から勧められたりする番組の影響力も大きいだろう。

それは、将来の進路についてもいえる。もちろん、成人するまでにさまざまな曲折があることは予測されるものの、この年代で描く職業選択に親の意向がかなり入っていると見受けられた。その際の親心は、いわゆる老婆心に満ちあふれるものと、自分の夢の投影の両方が入り交じる。そのすべてを子どもはまず素直に受けとめている、と親は自覚しているだろうか？

- **テレビのニュースは、お母さんがつけてるとき、一緒に見る。月曜 8 時から 1 チャンネルで「地球不思議大自然」という番組があるけど、4 年の時にお母さんに勧められてからずっと一緒に見てます。（小学５年男子）**
- **将来は薬剤師とか。資格が有ればどこでもできる仕事だし。母親に勧められました。（中学２年男子）**
- **ボランティアとボーイスカウトは良い経験になるから、とお母さんが勧めて、お兄ちゃんが入ったからぼくも入ったんです。（小学５年男子）**
- **親とは、いいたいことを言い合うほうだと思う。ためてしまうとすっきりしないから、がまんしない。（小学５年女子）**
- **将来のことはママと話す。がんばってね、と言われてる。（小学５年女子）**
- **親とか先生とはあんまり話さない。言わなくても平気。（中学２年女子）**
- **塾に行くとか行かないとかで親とけんかになる。（中学２年女子）**
- **お母さんにはいろいろ話すと、それは必要なの？と問いつめられます。お父さんとはめっちゃ話すし、怒られる。ゲームソフトを売る時はお父さんと一緒に行きます。あの店では売っちゃダメだ、この店のほうがいい、とアドバイスしてくれます。（小**

学５年男子）

- **お母さんとよく話すけど、言わないこともある。お父さんは家にいないから話せない。（小学５年女子）**
- **母親とも話をする。学校のことを話します。（中学２年男子）**

● 自己分析～自分はどういう人間だと思っているか？

親の影響を受けつつ、肯定的にも否定的にも「自分はこういうヤツです」という自意識を子どもたちは持っている。

子どもの素直さを改めて認めた上で、こうした子どもたちの自意識とは、案外親たちが見失いがちな側面ではないだろうか？わが子のことを心配するがゆえに、よりよく、よりましになってほしい、という思いから、親はさまざまな躾やアドバイス、いや忠告、警告、戒告、を行う。が、子どもは小学生といえども、自分の短所をとても自覚している。もちろん自覚するきっかけになったのが親や教師の注意なのだと思うが、痛々しい程に自分を責めているように思われるケースもあった。また、自分の好きなこともよく知っている。その好きなことは十人十色、もちろんひとりひとり違う。我を忘れる程夢中になれるものがあるというのは、かけがえのない宝物だと思うのだが、「世間的にはこうあるべき」「これが得意でいたほうが将来幸せになれる」というような大人の価値観を、これほど個性や多様化が叫ばれる時代にあっても、つい自分の子どもにそれを押し付けてしまっているという堂々めぐり。このことは子ども自身に葛藤が生まれる前には必ず親の葛藤がある、ということをあらわしていると思う。

一方、大人からほめられたり、賞等の対外的な評価を受けたりした経験が、次の意欲を生んでいることもわかる。子どもたち自身の自覚を大人が知ることで、彼らを追い込むのではなく、いいところを上手に引き出したり、クローズアップさせたりするような導き方をこころがけられないかと思う。

- **体を動かすことが好き。将来は、テニスのことならなんでもいいから、テニス関係の仕事をしたい。（小学５年女子）**
- **委員会は、飼育委員をしてるけど、本当は代表委員をやりたかった。前期にやったから後期はなれなかったけど…。委員会は好き。特別なことや発表したりするのが好きだから。（小学５年女子）**
- **得意なのは作文。一年と二年のとき、先生から勧められて書いた読書感想文が賞に選ばれたときうれしかった。最近忙しくてあんまり書いてないけど、たまにお話を作ったりする。どんどん頭の中にお話がうかんでくる。（小学５年女子）**
- **嫌だなと思うことは、家の手伝いをさぼっちゃったとき。妹とケンカしたとき。朝、機嫌が悪い自分がいや。目は覚めてるけど、ぼーっとしてて、ぎりぎりでピンチ！になっちゃう。早く目がさめて時間があるときは、ぼうっとして頭が回転しない。**

ぎりぎりで起きた時のほうが、早く支度ができるのが不思議。こんなところ、直さないとなあ、と思う。6 年になったら、中学になるまでにやりたい目標がある。できないことをやれるようになりたい。学校のテストのミスをなくしたい。漢字を完璧にマスターしたい。（小学５年女子）

- **小学校のときとくらべて変わったと思うことは、見た目を気にするようになったこと。（中学２年女子）**
- **苦手なことは暗算。それから覚えるのがいや。スピーチは得意ですね。（小学５年男子）**
- **目標が高いくせに気が抜けてしまう。受験に対しては、気合いかな、と思うけどまだ実感がわかない。（中学３年男子）**
- **もともとあんまりひとつのことに熱中できなくて、やってられなくなるほうで。疲れると楽しいよりストレスの大半が部活になってしまって。ベタベタがきらいで、しつこくされるのがいや。でもこうして自分の言ってることと、実際自分がやってることは逆かもしれないと思うことがある。（中学３年女子）**
- **口が悪いところがあって、一言がきつい、といわれていざこざになることがあるんです。（中学３年女子）**

● 通信添削と塾

習いごとには、親の意向が如実に反映されると感じた。小学生の間は子どもが望んでというより、学校で習うことだけでは足らないという親の強迫観念から通信添削を活用するケースが多いように思う。中学受験を意識した場合は塾、という傾向が強いように思われた。通信添削の場合、予定通りに提出できていないケースも多く、それができないことで親から厳しく言われたり、言われなくてもプレッシャーに感じたりしている子どもも多いように思う。

塾に行く行かないかで親との確執になる中学生もいれば、家から１時間もかけて遠くの進学塾に通ったり特別コースに通ったりすることを自らの誇りとして感じているように思われる中学生もいた。

また、子どもが塾に通うリズムが、家庭のリズムを形作っている。夕食の時間や、テーブルを囲む顔ぶれ、ひいては食事の内容にまで大きく影響を与えている。中学生になると、帰宅時間や就寝時間がだんだん深夜に及んでくる。これは、もうすでにこの国においては長く続いてきた状況だろう。この先も大きく変わることはないのか？

- **去年までスイミングをやってた。今は、通信添削をやってます。毎回出せてるかは微妙かも。（小学５年男子）**
- **帰ってきたら通信添削をやって…。（小学５年女子）**
- **通信添削は、ちゃんとやれてなくて、ちょっと行き詰まってる。（小学５年女子）**

- **学校で、塾へは行ってる子のほうが多いです。家に 10 時に帰ってきて、夜食を食べたりします。（中学２年男子）**
- **塾には中 1 から行っていて、5 科目やってる。2 年の後半になってから通う人が増えはじめた。中 3 になったら半分以上が通ってる。塾は電車で 40 分くらいかけて行ってます。4 時頃家に帰ったら、1 時間くらい支度したり夕食を食べて、5 時に家を出て、5：10 の電車に乗って、6 時前に駅について、6 時半から塾がはじまる。それから 9：30 まで。10：15～30 の電車に乗って、家に帰るのは 11 時頃。水、木、土の 3 日が塾。それから風呂に入って寝る。（中学３年男子）**
- **塾には、中 1 の冬期の少し前から行ってます。電車でとなりの駅。火と金は、部活から帰ったらごはんを食べてパソコンをやったりして、電車で塾に行きます。7：20 から始まって、終わるのは 9：55。特別進学コースはこの時間までやるんです。それから電車に乗って帰ってきて、駅前のスーパーに寄ったりして、家に帰ってくるのは 10：45 ころ。（中学３年女子）**

● 大人たちとの距離感

昨今の子どもたちをとりまく大人には、親、学校の先生の他にどんな人がいるのだろう？学校の先生とは、親の次にコミュニケーションの多いほぼ毎日顔を合わせる大人だが、結びつきを実感できるようなきっかけが自覚できないと、「先を生きる大人」としてのつきあいはうまれないようだ。そういう意味において、塾の先生やかかりつけの医者とは、切実な結びつきを持っていることがわかる。

歳の離れたいとこやちょっと年上の先輩との交流を持つケースもある。友だちとのかかわりに多くの関心を持つようになる発達時期を迎えると、親と上手にコミュニケーションをとれない子どもにとって、身近な第三者的な大人の存在が必要かどうかを断言することは難しい。現実世界の目の前にいる大人よりも、本や芸術作品など、メディアを通じて内面的な対話を経験する時期でもある。これは現代に限ったことではない。

- **学校の先生とはいろいろ話をするほう。（小学５年女子）**
- **学校の先生とは話さない。（小学５年女子）**
- **親や先生以外で話ができるのは、友だちのおかあさん。あとお医者さん。（小学５年女子）**
- **話ができる大人は、塾の先生。頼りになります。担任とも話す方です。（中学２年男子）**
- **前はあんまり好きじゃなかったけど、進路を相談してから信頼できる先生がいる。（中学２年女子）**
- **親や先生以外の大人では、いとこがいるからその人とは良く話す。（中学２年女子）**

- **女の先生とは話せる。担任の先生が好き。その先生が担任になったときはうれしかった。（中学３年女子）**

● 友だちとの距離感

放課後、習い事などのそれぞれのスケジュールがあって、学校で仲がよくても都合を合わせるのが難しい交友関係もあるようだが、話を聴いた子どもたちの中では、孤立や友だち関係で深い悩みを抱えているものは見受けられなかった。「いじめ」は、こどもたちにとって辛い状況を生み出す。しかし、みんなと仲がいい、友だちがたくさんいる、ことの方がいい、という前提があるとすれば、かえって暗黙の窮屈さを生みはしないだろうか、とふと思った。わが子の友だち関係を心配する親は多い。孤立してはいないか、うまくやれているだろうか。近隣社会から浮いてしまうことを気にかける親自身の心配を子どもに投影してしまっているのかもしれない。

- **仲のいい子は決まってる。クラスが一緒の子。すごく仲良くしてるときもあるけど、たいていみんなと遊んでる。（小学５年女子）**
- **友だちとは、秘密を作ったりしてる。それは秘密。（小学５年女子）**
- **すごく仲のいい子がいるけど、いつも遊ぶとはかぎらない。都合があうときに遊んでます。**

（小学５年女子）

- **日頃学校で会ってる友だちと携帯でメールをします。（中学２年女子）**
- **友だちはいっぱいいます。クラスがずっと一緒の子もいるし。公園で遊んだり、団地内のどこかで自転車に乗って遊んでます。駅前や近所のスーパーにおかしを買いにいくこともある。よく話す。たまにうそをつくことはありますよ。女は恐いんで遊びません。暴力をふるわれる。（小学５年男子）**
- **仲の良い友だちが 5 人居て、良く話をします。ゲームはあんまりやらない。（中学２年男子）**

● ひとりでいるということ

子どもたちは、ひとりになってどういうふうに自分の内面と向かい合っているのだろうということに興味を持った。しかし、ひとりでいること自体を大人から危険視されることも多い。前述の孤立への心配だけでなく、話を聴いた子どもたちの住む街では、昨今不審者情報が多発し、放課後ひとりで外で遊ばないよう学校からも親からも厳しく言われているようだ。実際は、塾の行き帰りはひとりだったりするのだが。その他、ひとりになれる時間や空間というのは、おのずと自分の部屋や誰もいない家の中で過ごす時に限られてくる。夕食後はパソコンでネットにアクセ

スしたりメールをしたりすることにずいぶん時間を費やしていた中学生は、ひとりになれるのはお手洗いとお風呂だけ、と答えた。

- **自分だけの日記を 5 年になってから毎日つけてる。ピアノとか宿題が終わってから、そのまま自分の部屋の机で書いてる。（小学５年女子）**
- **一人でいるときは、考えごととか、本を読んだりしてる。好きな本は「ダレンシャン」というバンパイアの男の子の話。（小学５年女子）**
- **一人で遊ぶ時はないですね。お兄ちゃんとカードゲームとか通信ゲームをやったりする。（小学５年男子）。**
- **ひとりきりになれるのは、お手洗いとお風呂だけ。（中学２年女子）**
- **土曜日ごろごろしてるときに、こっそりゲームやったり。土曜日がいちばんいいかな。一人になる時？平日の放課後かな。（中学３年男子）**
- **土曜日は 7：00 から塾。行きは一人で行くんだけど、帰りは駅まで友だちと一緒のこともある。一人で暗い道を帰ります。（中学３年女子）**
- **好きな時間は、パソコンやってるときと寝てるとき。それから絵を描いてるとき。音楽とかに触れてるとき。好きな場所は、自分のふとんの中。森の中でぼーっとしたり、誰もいない日当たりのいい場所が好き。（中学３年女子）**

● **金銭感覚**

毎月決まった額を小遣いとしてもらってその中でやりくりして自分の欲しい物を手に入れようとする子どもと、小遣いとは別に必要なことにはお金をかけてもらっている様子もみてとれた。おやつはお小遣いとは別に保証されていて、決まった額を渡すのは金銭教育を意識してのことだろうと推察される子どもの家庭環境には、千円に窮することはないという親の経済力と、子どもに対する支出を惜しまない、という傾向を実感した。

- **お小遣いは、毎月 500 円。それは貯金してる。本は、親にお願いして買ってもらう時もある。（小学５年女子）**
- **お金は、親に必要な時にもらいます。（小学５年女子）**
- **お小遣いは、親に必要な時に必要なだけもらいます。（中学２年女子）**
- **おこづかいは、毎月 23 日に消費税含めて 525 円もらってますけど、ちょっと不満。6 年になったら 630 円にランクアップするんだけど、お兄ちゃんは 1000 円。本を買う時は買ってもらえる時もあるけど、お菓子は自腹！まんがを買いたいから今 3000 円ためてる。（小学５年男子）**

● **オカルティックな興味**

「恐い」と思うのは、どんなとき？という質問の背景には、身の危険を感じるようなことはないだろうか、という思いがあったが、子どもたちは、暗闇や静けさといった神秘に畏怖を感じているような答えを返してきた。科学的に説明のつかないことに興味を持つ年代でもあることは、自身の 10 代を振り返っても理解できる。こうした感覚を、非科学的なもの、として触れないことより、世の中の「分からないこと」がある、という可能性として、大人がどう向かい合うか、またはそっと見守るかは、大事な視点かも知れないと思った。

- **いつも最後にお風呂に入るんだけど、電気を消した後のリビングが真っ暗でこわい。暗い時の鏡がこわいなあ。（小学５年女子）**
- **街の中は灯りがありますからね。前に島に行って真っ暗やみを経験した時、月のあかりだけですごく神秘的だった。竜巻きが過ぎるのをみたときも恐かった。ちょっと霊感あるんですよ、ぼく。あんまりいってもわからないだろうけど。（中学３年男子）**
- **学校の横を自転車で通ってる時、誰もいないのにサッカーのゴールにボールが当たる音がしたことがあります。はっきり聞こえたのに誰も居なかった。足が透けてる写真をうつしたこととともありますよ。（中学３年女子）**

● 遊ぶ場所、遊びたい場所～大人の心配、子どもの興味

子どもどうしで少しずつ行動範囲を広げて行く時期、男の子達にとって自転車は、大きな役割を果たす。街道沿いの量販店は、大人にとっては行ってほしくない場所であっても、昔の駄菓子屋を超えるミラクルワールドとして子どもたちの興味をひくものや、友人たちとその場所を訪れること自体の価値を持っているように思える。

一方、カラオケボックスを定番の遊び場にしている子どもがいることへの驚きがあった。自分の小遣いで遊べるのだとしても、興味の対象が向かう先によって、彼らの行動範囲が大きく異なってくるのだ。また、さまざまなメディアからの情報にさらされる昨今において、女子中学生が友だちとの１泊旅行へのあこがれを持つことについて理解できたとして、それを実行に移すのはいったい何歳ぐらいなのだろう、と考えたとき、親が子どものことを理解でき、彼等の行動や意向をコントロールできるのはほんの限られた一時期までなのだということを思い知らされる。

- **休みの日は、部活の試合があったり。友だちと遊んでます。買い物とか映画とか、運動したり。自転車で隣町のドンキに行ったり。サッカー用品を買う時は、駅まで歩いて電車に乗って行きます。（中学２年男子）**
- **夢中になってるのは、遊び。プリクラとかメールとか、雑誌。休日は友だちと買い**

物とかゲームセンターとかに行きます。行ってみたいのは、友だちと１泊ぐらいの旅行。ディズニーランドとか。（中学２年女子）

- パソコンのゲームにはまってる。あと友だちとカラオケに行く。水曜日は部活がないんで、水曜の放課後２時間くらい駅前のカラオケボックスにいったり。休日は気分によって過ごし方が違うけど、プリクラやったり、カラオケ行ったり、ファーストフード屋さんにいったりする。行ってみたいのは、渋谷とか街に行ってみたい。店をいろいろ見て歩きたいから。それから友だちと１泊で旅行にいきたいです。（中学２年女子）
- 街道ぞいの店にはいくなといわれてるんだけど、行くと水かもらえるので、友だちと行ってもらって帰る時もある。（小学５年男子）
- 仲のいい友だちとは日曜日に会う。朝早くから 4、5 人で。ボウリングには家族でも行くけど、友だちとも行く。あと、公園でサッカーとかバスケやったり、映画を観に行ったりする。（中学３年男子）

● あこがれは身近な存在

あこがれをいだくのは、その人が自分の理想を体現していると認めたとき。理想とは高い目標。職業や有名人に漠然としたあこがれを持つことだけでなく、友だちや先輩といった身近な存在にあこがれを感じていることもわかった。このことは、決して目標が高くないというのではなく、相手の素晴らしさを認めている、というその子どもの素直さからきているのだろうと思った。

- 具体的にはいないけど、宇宙センターでロケットを打ち上げる人はすごいと思う。（小学５年男子）
- シャラポワ選手。動きがかっこいいから。（小学５年女子）
- 習ってるピアノの先生。譜面を見るだけで間違えないで弾けるから。私も上手になりたい。（小学５年女子）
- 中村俊輔。サッカーはうまいし、人付き合いがよさそう。（中学２年男子）
- スポーツ万能で親切でかっこいいクラスの友だち。勉強もできる。おふざけでいじめられるときもあるけど。（小学５年男子）
- 部活の先輩。部活と勉強を両立してるから。卒業してからもときどき遊びにきてくれる。（中学２年女子）
- 部活の友だち。同じ学年だけどあこがれてる。（中学２年女子）
- 絵のうまい人（中学３年女子）

● 自意識とコンプレックス

はじめに、子どもたちが把握している世界観について、実際の生活範囲からは小さな世界だと書いた。そんな自分のいる現実の中で、テリトリー意識とコンプレックスが生まれているのがわかる。この時期に彼等が他者の存在をどう認識していくかがいかに大切かは、昨今のこの年代をとりまく多くの事件からも自明なのだが、誰がどのように関れるのか、というのは、いつも事が起こった後にしかふりかえることができないもどかしさがある。

- **嫌なことは、自分の筆箱とか机の中を見られること。大切な物が入ってるんですが。とられたこともある。（小学５年男子）**
- **小学校のときとくらべて変わったと思うことは、見た目を気にするようになったこと。部活に入って痩せて、ストパーかけて、着るものは自分で選ぶようになったから。（中学２年女子）**
- **一つ年下の弟が一人がいるんですけど、弟が自分にとって一番うるさい人間。一番好きな時間は、朝の時間。親がまだ寝てる時 3 時から起きてる時もある。嫌いな時間は、昼と夜。親がいるとき。ところで、さっきの学校のうわさの話。うわさの A ちゃんなんですけどね、ちょっとかわいい子なんですよ。その子が自分のことをなんか、好きとか友だちにいってるらしいんだけど、自分じゃあまり興味ないんだけど、ほんとかなとか、てきとうに言ってるんじゃないかとか。まあ、どうでもいいんですけどね。（中学３年男子）**
- **苦手なのは体力がいること。社会の暗記。しらねーよ、この人誰？みたいな、顔と名前が一致しない。興味を持たないとやれないです。なんかここにいたいんだけど、遠くに逃げたいかも。（中学３年女子）**

３．ヒアリングを経ての考察

●話を聴くこと自体の効用～意識化することで変わるもの

今回のヒアリングは、親の承諾を得られることを条件としたことで、街を歩いていて気になった子どもではなく、趣旨を理解してもらえる親、というルートから掘り起こしたこともあって、親の言うことを比較的素直に聴く子どもたちであったと思う。しかしながら、子どもたちが大人に対してこういう形で自分のことを話す場面というのはそうあるものではない。家族や友だち、学校の先生たちとの間でもちろん日常的な対話はあるだろう。しかし対話の中で、「よくできました」「ここがだめ」というような評価を加えることなく話を聴くこと――つまりカウンセリング的な効用もあったと思われる。言葉にするために、自分自身をふりかえり、意識化することで発見するものがあるからだ。

受験、インターネット、核家族、親の生活、学校、教師、つまり「社会」の影響や犠牲といった要因へのひとくくりの言及は、どこまで有効なのだろうか。大きな社会構造からは逃れようがない一方、ひとりひとりのケースは全て異なるからだ。ここで聴いた範囲では、子どもたちの葛藤は決して他愛のないことではないが、成長していくプロセスに必要な一場面であって、過度に注視するものでもないと思われた。しかし、プロセスを見守る大人の存在は不可欠だ。孤立しても、うまくやれない時の自分も自分であってかけがえのない自分、他者の存在を「うざい」もので、自分が消えるか他者を消すかというような選択肢しか思い付かないような生き方ではなく、かけがえのない自分、同じくらいかけがえのない他者、という自尊感情を意識させるために、周りのおとなたちができることはあるはずだ、と思った。

学校や塾、習いごとで日々を過ごす子どもたちは、忙しい。そんな中、今回一部の子どもたちとは２度にわたって話を聴くことが出来たが、話を聴くことでお互いの距離が縮まっていく。点数や評価をつけられない関係なのだ、と感じてもらえると、短い時間であっても子どもたちはずいぶん心を開いてくれるようになる。手間をかければかけるほど対象に愛情がわいてくるのは人間の本性だろうと感じて、親たちがこんなふうにわが子と向きあえるとお互いの気づきがあるのだが、と頭では思うが、実際は難しいこともわかる。親は愛情において、子どもにこうあってほしい、こうであってほしくない、という思い入れが強くなるからだ。それが現代では過干渉となってマイナスの要素としてはたらくことも多いと言われる。先に、「学びの場.com」のサイト上で「親たちの子育て不安に関するアンケート」が行われたが（参照：http://www.manabinoba.com/index.cfm/4,6360,172,html?year=2006）、そこに記述となって表れた親たちの言葉は、「子どもとの意志の疎通が出来なくなることへの不安」「子どもが自分の思うようにいかないいらだち」「どう導いていいかわからない不安」という３つの要素に大別できたように思う。が、その子どもがどんな「今」を生きているのか、

に心を寄せることで、ふと「わかる」瞬間がある。成長のプロセスにあり、自分なりの経験の中でせいいっぱい考え行動し、内面も身体も大きく変化を遂げていくこの時期。それは、大人である私たちだれもが通ってきた道でもあり、全く理解できないはずはないと思うのだ。

しかしながら、自分の子どもの頃には無かった新しいものが、目の前にある時代。小さな限られた場所で暮らす子どもたちの生活に、親の世代におけるテレビや電話を超えたインターネットという通信手段が訪れたことで、時間と空間を超えたコミュニケーションが可能な現代を生きる子どものリアリティを変容させていることは、多くの人が指摘しているとおりである。インターネットの功罪を語ることも大切だが、ここでは、すでにそんな社会に生きている子どものリアリティに、大人の側からもう少し気持ちを寄せてみる、ということの大切さをあえて伝えたい。子どもたちに無理矢理かかわることよりも、しっかり心を寄せて見守っていさえすれば大丈夫、という考えは楽観的過ぎるだろうか。

子育てを取り巻く不安は、子どもが問題なのではなく、大人～親自身の問題だということをどうやったら大人がもっと自覚できるか。朝、目が覚めたらリビングのテレビから暗いニュースをくり返し刷り込まれ、電話で PTA での人間関係の悩みを話す声を耳にし、家の中に物があふれ、あなたのためを思ってのこととお仕着せがましくされたかと思うとはけ口の鉾先になったり、先の展望が見えないのに苦境を乗り越えることばかりを求められていることが嫌になったら、誰だって簡単に現実を変えられる手段を求めてしまうと思う。子どもは親の言うことを聞いて育つのではなく、親のすることを見て育つ、というのが筆者が思うところなのだが、今回のヒアリングを経てそのことが改めて実感を伴ってきた。そして子どもたちのひとりひとりの違いと、それぞれの可能性を信じることができた。

これから、子どもたちの可能性を引き出すためにできること、もしくはその子どもなりの表現を尊重し、表現手段を身につけたり磨いたりするために大人のできることに取り組んで行きたいと考えている。

以上

（聞き手／執筆：森川千鶴　　プロフィール　http://homepage3.nifty.com/anyplace/）